



Văn nghệ

VÌ TỔ QUỐC, VÌ CHỦ NGHĨA XÃ HỘI
XUẤT BẢN TỪ 1948
SỐ 22 (1742)
THỨ BẢY 29-5-1993

HỘI NHÀ VĂN VIỆT NAM

TRIỂN KHAI NGHỊ QUYẾT IV
CỦA TRUNG ƯƠNG ĐẢNG
VỀ VĂN HÓA - VĂN NGHỆ

KẾ THỪA VÀ ĐỔI MỚI

TRẦN TRỌNG ĐĂNG DÀN

Đã gần một thập kỷ, sự nghiệp đổi mới diễn tiến ở Việt Nam và đất nước này đã được ghi phóng gần mười tám năm. Với lịch sử, những khoảng thời gian ấy là rất ngắn, nhưng với chúng ta thì lại rất dài. Bởi vì, trong gần mười tám năm ấy và trong mười tám năm ấy, xét trên phạm vi quốc tế cũng như quốc gia, đã hội tụ hàng loạt sự kiện vô cùng to lớn, đã nên chặt chẽ hàng loạt đối tượng, biến động và cũng đủ để lại một dấu ấn sâu sắc đối với đời sống xã hội đã hiện hình rõ rệt trong đời sống văn học, nghệ thuật của chúng ta. Cho đến nay thì những biến động, đổi thay đủ để từ đời sống thực tiễn của văn học, nghệ thuật đã buộc chúng ta phải rà soát lại hàng loạt vấn đề lý luận kể cả lý luận cơ bản. Ở đây chỉ xin đi vào một vài trong số các vấn đề cơ bản đó.

Một thời gian dài trước đây, người làm văn nghệ chúng ta đã hoạt động sáng tạo theo phương châm: "đi đến những nơi tiến tiến, sống giữa những người tiến tiến". Tức là lấy người tốt, việc tốt, lấy cái đẹp, cái hay, cái đúng cảm, kiên cường, anh hùng, cao cả... làm đối tượng thể hiện chủ yếu của văn học, nghệ thuật. Cần nói ngay rằng: Phương châm hành động đó mang ý nghĩa lịch sử lớn, gần bó chặt chẽ với thực tiễn xã hội của một thời và đã góp phần rất đáng kể trong việc tạo nên những thành tựu không thể nào phủ nhận được của nền văn nghệ cách mạng Việt Nam suốt mấy thập kỷ. Lấy cái hay, cái đẹp, cái tốt, cái cao cả, anh hùng đó khơi gợi sức vươn lên tự giải phóng của con người, giữa cuộc chiến tranh khốc liệt, giữa cuộc sống cực kỳ gian khổ thời chiến là một việc làm đầy tính nhân bản. Nếu xa rời quan điểm lịch sử, xem xét vấn đề một cách vội vàng, vội vàng trước những nhu cầu và những đòi hỏi thường thức mới của công chúng, chúng ta rất dễ bị lấn lộn, dẫn tới sự khai thác vội vàng đối với hàng loạt thành tựu của văn học, nghệ thuật mấy thập kỷ vừa qua, liệt chúng vào loại văn nghệ "số hồng", giản đơn, thấp kém. Và những sự khai thác như vậy phải nói là sai lầm.

Huân toàn không phải như ai đó khư khư bảo vệ cho quan niệm "đổi mới là phải khước từ", giao "trách nhiệm" cho việc đổi



NHÂN NGÀY 1-6 (Xem trang 8. 9. 10. 11)

ヴァルトシュタイン・ソナタ

手塚 甫

他の人には大した意味をもたないことであっても、自分にとってかけがえのないというものがある。僕にとって、ベートーヴェンのピアノソナタ「ヴァルトシュタイン」がそれである。予め断っておくが、僕は音楽的知識は皆無と言ってよい。だから音楽的な能書を言うつもりは全くない。この曲に纏わる思い出を通して、自分にとってかけがえのない所以を少々ここに記してみたいと思っているだけである。

この曲を初めて聞いたのは、凡そ20年ほど前のことである。当時、僕はウィーンに居た。と言ってもこれを生演奏で聴いたというのではない。親しくなったばかりの若い友人夫婦から夕食に招かれ、その下宿に行った時のことである。音楽好きのその友人は「最近聞いた中で面白かったもの」として、エーミル・ギレリスの演奏する「ヴァルトシュタイン」のカセットを聞かせてくれた。僕は、その時までこの曲の存在さえ知らなかった。

早いテンポで歯切れよく、リズムカルに流れるような音の運びに、これは相当な演奏家だなと思った。その友人によると、ギレリスはすでに日本でも演奏会を開き、大きな評判を呼んだピアニストだと言うことであったが、その名前もまだ僕は知らなかった。

当時、僕はポケットサイズのカセット用のレコーダーしかなく、ラジオも持っていなかったの、(ラジカセはまだなかった)早速ダビングしてもらって、下宿で聞くことにした。

小刻みな早いテンポの第一楽章とは対照的に、第二楽章は童謡を思わせるほどの素朴なテーマが、やがてバリエーションをいくつか重ねて行く度に大きさと深さを増して行く。よく聞いていると、音の流れはたゞ真直ぐに走るのではない。あるいは密やかに、あるいは押しよせる怒涛のように、そしてうねりを

打ちながら進んで行く。しかも曖昧な音が一つもない。岩に当って踊る水しぶきのような躍動感と輝きが音の一つ一つにある。怒涛の中の水の動きの一つ一つが見えるようだ。そして、そういう奔流の昂まりをドンとこちらにぶつけるようにして演奏は終る。

はじめのうち、ベッドに寝ころび、寛いだ気持ちで聞いていたものが、いつの間にか体を起こし、レコーダーと睨めっこしているような恰好で聞き入っている自分に気付く。とても寝ころんでなどいられないのである。曲が終った時の何とも言えぬ爽快感、そして「やってやるぞ」と言いたくなるような高揚した気分はたまらない。またすぐ繰返して聞きたくなる。

この録音を、僕は何度聞いたか知れない。別に数えた訳ではないが、当時は連日、一日に少なくとも5回は聞いていたように思う。カセット一つを駄目にしてしまい、友人にダビングし直して貰ったほどだ。何回聞いても飽きなかった。その後、機会があれば、録音、生演奏を問わず、他の演奏家による「ヴァルトシュタイン」を聞いてみた。バックハウス、ケンプ、ホロヴィッツも聞いた。グルダもポーリーニもツィマーマンも聞いた。各々に特色のある演奏で、演奏する人によって同じ曲がこんなにも違うものかということがよく分ったが、ついにギレリスを超えるものはなかった。と言うよりは、他の演奏家のものを聞きながら、知らず知らずのうちにギレリスと比較しているのである。そこはギレリスはそうようには弾いていない。ギレリスならそこはもっと躍動するように弾くの、と思ってしまう。そしてギレリスと違う分だけ、その演奏が不十分なものに思えるのである。僕の頭の中には、ギレリスの音の一つ一つが刻みこまれてしまっていたのだ。

所で、この曲を、僕は、今は殆んど聞かな

い。飽きてしまったからではない。むしろその逆である。この鮮烈な思いを少しでも薄めたくないからである。僕にとって気休めや寛ぎのための曲ではない。この曲を聞くにはそれに応しい心構え、積極的に求める何かがなければならぬ。今の自分にはそれが欠けていると思うのである。

実を言うと「ヴァルトシュタイン」を聞く時、決して思い出すことがある。この曲を熱心に聞き入った頃の自分の姿だ。当時の生活が蘇って来る。この曲に一生懸命耳を傾けて聞いた下宿のあの部屋の一つ一つが、まざまざと目に浮んで来る。洗いたてのベッドのシーツのかおりまでが蘇ってくるのである。そして、この曲をはじめて聞かせてくれた友人I君のことを思う。彼が僕を呼んで夕食をごちそうし、一晩泊まって行けと言ってくれたのも、僕の生活が、その頃あまりに余裕がなく、下宿では風呂にもろくに入れないことを知ってのことであつたらしい。僕に元気をつけさせようとの配慮からだった。

当時、ウィーンに来てまだ間が無かった僕は、早く言葉に慣れ、生活に慣れようと初老のオーストリア人夫婦の暮らす家に下宿したが、些細な行き違いが重なって、なかなか気持ち落ちつけずにいた。その分大学の図書館で過ごす時間が増えた。図書館は夜の10時まで開いていて、冬は暖房もよく効いているので居心地がよく、勉強もよくはかどる。が、それでも授業にはなかなか追いつけなかった。授業というと、当時はラテン語に苦しめられていた。一日置きに2時間、週6時間あった。授業には出るものの、ドイツ語で話す教師の説明が全く分らず苦勞したが、それを隣で気のいいZ君が親切によく助けてくれた。そんな中で、時間を見つけては、オペラや音楽会によく通った。いつも立見席だったが、これが殆んど唯一の寛いだ時間であつた。

対人関係でも勉強同様なかなかまゝならなかった。ちょっとしたことでうれしくなったり、気が沈んだり、日本で家族と共に居た時にはこんなことがなかったのと思うほど感

情が容易く揺れた。人から裏切られるような思いをしたこともあった。一方、自分にあまりに余裕がなく、折角好意を寄せてくれたのに冷い仕打ちをしてしまって、今になってその痛みに心がうずくこともある。その中で、「ヴァルトシュタイン」だけは決して僕を裏切らなかった。こちらの求めにいつも応えてくれただけでなく、励ましてくれたのである。

あちこち神経を尖らせながら、でも不思議に辛いとか嫌だと感じることはなかった。夢中だったのであろう。気がついたら、日本で詠えて作ったはずのYシャツの襟がいつの間にか一番上のボタンをかけても自分の顎がすっぽり入ってしまうほどダブダブになっていた。しかも、それを他人から言われてやっと思いついたのである。

これら全てを含めて、僕はウィーンでの生活を懐しく思う。「ヴァルトシュタイン」に支えられながら、自分よりずっと年下の若い人達と机を並べて勉強出来ることが、とても贅沢に思えた。他のことは何も考えずに、やりたい勉強に専念出来ることがとても幸せに思えた。

今、自分は、ここから随分離れてしまった。随分いい加減になってしまっている。元にもそのまゝ戻るということは所詮出来ないことだとしても、「ヴァルトシュタイン」に、せめてもう一度あのような気持ちでしっかり向きあつて聴き入ることが出来るようにはなりたいたいと思うのである。この曲は、僕の生き方の尺度なのだ。

今、北里で学ぼうと集った新入生の諸君がこれからの4年乃至6年の生活の中で、君の「ヴァルトシュタイン」を見つけ、北里のキャンパスが君の「ウィーン」になったら、と自分の細やかな思い出をたどりながら僕は願っているのである。

(教養図書館長)

女性とミニスカート

道家 建二郎

私は男である。その証拠を見せろ。どうして、なぜと問いつめられると少し困ってしまうが、少なくとも生物学的には男だと思っている。そこで基本的に女性というものが解らない。昨年、Tバックというものがはやったそうであるが、なぜ自ら好んでそのようなものを高い金を払ってまで身につけるか根本的に解らない。極々わずかの人たちはそれを見せることによって商売の道具にしていたかもしれないが、たぶん多くの若い女性は密かに購入して、決して人には見せずに着用していたのではなかろうかと想像したりする。どうも女性はお化粧をするとき、着るものを選ぶとき、男を意識するよりも同性の目を意識する方が強い、むしろ男なんて基本的には眼中にない、という見方の方が正しいのではないだろうか。たぶん多くの男どもは女性が美しく装い化粧し、あるいはTバックを身につけるのは自分たち男のためにだと思っているが、何かとんでも無い間違いをしているのではないかと思う。

生物はその個体に寿命がある以上、遺伝子を子孫に伝えるという形でしか、自らの存在を明らかにすることができないように運命づけられていると言って良い。実際により良き子孫を残すことに全勢力を傾けているのが生物である。そうでなければ、とっくに滅んでいるはずであろう。そこで雌雄の区別のある高等な動物は何かして良き配偶者を得ようと争い、勝者だけが将来の展望を約束され、敗者はその個体の将来の死を意味することになる。

ヒトも生物の一員である。従って共通の運命を担っているに違いない。しかし、現代のヒトはその様に行動しているであろうか。少なくとも、今の日本人を見る限り大部分の人は生物の原理のみによっては行動していない。これから24時間以内に何人の人が異性を

軟派するか知らないが、その何割が子孫を残すという明確な意志を持って軟派するだろうか。あるいは、これから24時間内に性行為をするカップルのうち何組が子孫をつくることのみを目的にしているだろうか。むしろ、子孫をつくらないように最大限の努力をしている人たちが圧倒的に多いのではないだろうか。即ち、本来「生殖」のための行動を違った目的のための行動にすり替えているのが、生物としてのヒトではなく現代の人の特徴ではないだろうか。本来の目的を離れた行為にルールはない。目立ちたがり、だまし、よいしょ、はったり、おどし何でも有りである。このことと全く同じことが「食べる」ことにも見られる。動物は個体を維持するための行為として食べなければならない。あらゆる努力をしてでも食べなければならないのである。ところが今や動物にとっての餌が変質していると考えざるをえない。フランス料理のフルコース、前菜からメインディッシュ、デザートまで全部が一緒にバケツに入っている、それを食べれば栄養摂取の目的にはほとんど変わりはないであろう。しかし現代人は決してそれを食べ物とは認めないであろう。それどころか栄養にならないことを最大の売り物にしている食べ物さえ開発されている。このような現代人の食事行為はもはや栄養摂取のためだけの行為ではなくなっている。グルメ、げても喰い、過食、絶食、ここでも何でも有りの法則が成り立つのである。さあ、ここまでくればもうすこし。「衣服」についても全く同じ法則が成り立つことは賢明なる皆様にはもうご理解できるであろう。防寒とか身を守るというような本来の目的をはずしてしまえば、Tバック、トップレス、電気ピカピカ、機械仕掛け、それこそ何でも有りの世界である。ミニスカートぐらいでびくびくすることはないのである。

この辺で強引に結論をひねり出すと「現代人は生物としてのヒトのもつ基本的な属性から離れたがる」といえるだろう。すなわち、DNAの呪縛から解放され、文化に生きようとしている、それが現代人なのである。文化とはこれが良い、あれはおもしろいと皆がとりあえず決めることであると思う。あるノーベル賞受賞者はヒトの全DNAが解析されたら精神構造まで含めてヒトを理解できるといっている。しかしミンスカートの遺伝子があると思いますか。生物としてのヒトの男女間には明確な違いがある。そこで男女雇用機会均等法ができたということは大変な出来事なのである。なぜなら文化に生きる人にとっては男女の違いは無いと皆で決めてしまったからである。この文の始めに私は男であるなどを書いてしまったが、実は男だ女だなどということは全く意味のない世界に突入しているのである。

あなたは人ですか、それともまだヒトですか。

(生物学)

「講義用参考文献コーナー」と

「ゼミ指定図書コーナー」

教養図書館では、講義の理解に役立つ参考書・テキスト等を購入して皆さんの利用の便宜を計っております。図書館2階にそれぞれのコーナーがあります。利用の方法は他の一般図書と同様です。大いに活用してください。

閲覧証の交付

教養図書館を利用するには、閲覧証が必要です。新入生の皆さんには、下記の日程で交付します。当日カウンターまで取りにきてください。但し、医学部は、医学図書館で、理学部は、理学図書館で5月9日以降交付します。尚、交付までの間は、学生証を使用してください。この閲覧証は、卒業するまで有効ですので、大切にしてください。

薬学部	5月 9日 (月)
獣医畜産部	5月 10日 (火)
水産学部	5月 11日 (水)
看護学部	5月 12日 (木)
医療衛生学部	5月 13日 (金)

複写機利用方法について

教養図書館では、複写サービスをプリペイドカード方式により行っております。このカードは、相模原キャンパス内の図書館ならどこでも利用できます。なお、販売は各図書館カウンターで行っております。

〈共通プリペイドカード料金〉

コピー	35枚分	500円
	70枚分	1,000円
	350枚分	5,000円

(1枚あたり約15円です)

福田郁子

Sさんに会うまで、私にとってベトナムはあまりにも遠い存在であり、思い浮かぶことといえば、戦争・枯葉剤・難民といったネガティブなものであった。Sさんは大きな黒い瞳が素敵なおバさんだが、会うたび何故か元気が出る。Sさんはベトナム文学の研究者である。Sさんのお宅でベトナムを訪れたときの写真を見せて頂いた。ベトナムの人々はカメラに笑顔をつくらない。不思議な感じがした。じっとこちらを見つめる目は印象的だが無表情だ。Sさんは、これこそ人の顔だねと言う。通りに座って行き交う人々の表情を見ているだけで時が経つのを忘れると言う。私達にも悩みはあるが、ベトナムは貧しい国であり彼らの悩みは直接生死に係っている。それだけに喜怒哀楽もはっきりしている。確かに笑って写っている時は体全部で表現していた。Sさんの魅力の秘密はベトナムの人々の生きる強さを感じていることなのかもしれない。

戦争に主眼をおくのではなく、ベトナムの人物を表現した作品としては、ミュージカル「ミス・サイゴン」やO・ストーン監督の映画「天と地」が知られている。この2作品は対照的で、前者の主人公は自殺してしまうが、後者では、主人公レ・リーの運命に流されない強さが描かれている。ベトナムの文学作品も戦争や社会的背景はあるものの、忍耐強く生きる女性や、幸福の追求など、そこに生きている人々の姿をモチーフとして捕えている。この機会にベトナム人によって書かれた

小説を紹介したい。違った角度から今のベトナムに触れてみよう。

表紙はベトナム作家協会発行の機関紙「文芸」の一面である。右上に書かれた“祖国のために 社会主義のために”とはいかにも共産圏の国らしい。左の記事の見出しは“継承と刷新”伝統を継承しつつ、新しいものをとり入れていこうと訴えている。

ドイモイ政策の1つの課題として、短期間で物価が1000倍にも跳ね上がってしまったインフレを打開する経済の建て直しが挙げられる。社会主義国家でありながら、経済開放化の兆しも見せている。ベトナムの主要農産物である米を、日本人が口にする日も近いかも知れない。
(化学)

〈参考図書〉

『流れ星の光』—現代ベトナム短編小説集—
ズオン・トゥー・フォン他著、加藤栄訳、新宿書房

『虚構の楽園』 ズオン・トゥー・フォン著、加藤栄訳、段々社

『もっと知りたい ベトナム』桜井由躬雄編、弘文堂

—— 編集後記 ——

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。教養図書館では、閲覧ニュースを年3回発行しています。エッセイをはじめその時々のお知らせなどを掲載しています。図書館利用案内とあわせてご覧下さい。

閲覧ニュース72号

1994. 4 発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里 1-15-1

電話 (0427) 78-8005

発行責任者 手塚 甫